

白杵市加島家資料の概要とその認定をめぐる問題

―白杵市加島家資料目録の編纂によせて

鈴木 元

はじめに

白杵市に伝わる典籍については、何年か前に稿者も委員としてかかわる形で組織された藩政史料調査委員会により、かつての藩主家たる稲葉家の資料を中心に、書誌情報を付した目録が報告されている（『白杵藩政史料調査事業報告書』白杵市教育委員会、平成二十八年）。ところが、当該事業が「藩政史料調査」という括りを設けてのものであったことに加え、文化庁からの補助を受けて期限を限られての調査であったため、白杵市の保管に帰していた資料群のうち、「藩政」と直接に関与しないとまず判断されたものは、上記報告書からは除くこととなった。ここに報告する加島家資料もそのひとつである。

ところで、藩政史料調査の一環として行った典籍部門の調査では、その大半を占める稲葉家の旧蔵書が調査の中心となった。そこで調査対象とされた稲葉家旧蔵書とは、かつて財団法人白杵図書館（現在の白杵市立図書館の前身）に稲葉家から寄贈され、その後も数次にわたる寄贈をうけて現在に至ったものであるが、図書館における長年の保存期間を経るなかで、稲葉家以外の諸家からも図書館へ典籍等の寄贈がなされたことにより、部分的にせよ伝来の混乱が生じたこともあったようである。その辺りの事情については、前記報告書の解題にふれられているのでご参照いただきたい。このたび、藩政史料調査の一環として実施した典籍調査の延長で、報告書から漏れた資料群の体系的把握のための調査に取りかかったわけであるが、まず問題となったのもやはりこの混乱である。

稲葉家資料の場合と重複にはなるが改めて確認しておく、まず、混乱要因の第一には、加島家資料として現在一括にされているものが、実は安定的に一括で保管されていたわけではないという点がある。かつて図書館への寄

贈という形で受け入れられ、一定の期間、図書館の書庫に収蔵されていた際には、基本的に加島家からの寄贈資料は一まとまりとして保存されていたと思われるのだが、その後、大分県史の編纂の際に、伝来ごとの括りから外され稲葉家資料等とともに、内容の上から分類し直された資料もあったようである。因みに『大分県史』の刊行は、昭和五十六年から平成三年にかけてである。今回作成の目録（これを「新目録」と呼ぶこととする）において、「ラベル」と表示したのは県史編纂の際に付された青色の枠線のラベルに記載された分類番号であり、ラベルの貼付された資料は一度は伝来ごとの括りから外されたことが明らかである。

県史編纂にあたり、図書館に寄贈されていた各種資料やコピーにより収集した資料は、上記のごとく内容分類をされた上で伝来とは別に整理し直され、配架上の便宜に利するよう整理番号が付されたのである。その際に、県史用史料の目録も作成されたのであるが、ここにも史料名称と青ラベルの整理番号は記されているものの、何家の史料であるかの伝来情報は記載されていない。おそらく、県史編纂にあたった当時の担当者うちでは、個々の史料の伝来について自明であり、いつでも元に戻しうるとの自信があったため、の処置かと思われる。

ところが、県史編纂のためラベルにより新たな分類の為された史資料（特に文書類）は、県史の編纂終了後のある時点でその分類を解かれ元に戻されたものと思われるのだが、その後の保管のあり方については、はっきりしない点が多い。特に他の資料と紛れやすい文書類については、ある時期にボール紙の表紙を付けた封筒に入れての整理が試みられたことがあったようである。上記の藩政史料調査が開始された時にはこのような状態で保管されていたものも多かった。しかしながら、このボール紙表紙付き封筒による整理は、結局貫徹されることのないまま未整理の文書を多く残しただけではなく、体系的調査が開始されるまでの長い期間の間に、閲覧その他の目的から封筒から出し入れがなされたこともあったものと思われる、また整理を始めた当初の意図とは関係なく、無秩序に文書が封筒に投入されることもあったようである。藩政史料調査に着手した時点では一つの封筒に大量に文書が詰め込まれていた、むき出しのまま保管されていた文書もあるという状態であったという（以上、文化財課担当者の談による）。

このような混乱を正すにあたり重要となるのが、寄贈者から図書館が受け入れた時の寄贈書目録である。加島家資料に関して、現在、確認できている寄贈書目録は昭和三十七年のものと、昭和四十五年のもの二つあるのだが、この二種の目録についてふれる前に、今回の調査の基礎資料となっている仮目録についてまずは述べておかなければならない。この仮目録は、複数次にわたり加島家より寄贈された資料群を一括のものとして保管するため、図書館においてある時期に作成されたものようである。「加島英国資料目録綴／加島修氏寄贈」と題されたこの仮目録は、表紙一枚と白杵市所用のB4横の野線紙二十三枚から成り、「易学」以下一定の分類のもとに資料群を把握しようと試みたものである。ただし、目録の作成者は不明であり、作成の時期も厳密にはわからない（なお後述）。それ以外にも、以下に述べられるように幾つか疑問な点を有するものの、「目録綴」作成当時の図書館において、加島家からの寄贈資料と認知されていた資料群を網羅したと考えられることから、この「目録綴」（以下、これを「旧目録」と称する）を基礎において加島家資料の調査を進めることとなった。

受け入れ目録

既に述べたように、旧目録とは別に、加島家から図書館に資料の寄贈がなされた際に作成されたと思われる目録が二種伝存している。加島家から寄贈された資料の認定には、最も信頼のおける一次資料としてよい。そこで、まずはこの二種の目録の内容について詳しく紹介しておく。

「加島修氏寄贈図書一覧表（昭和三七、一〇、四）」と題された目録には、書名と冊数の欄を設け、以下のように資料について縦書きで記載されている。一部、誤記と認められる箇所があるけれども、私の判断により改めたところもある。頭の算用数字は私に付した通し番号である。記載の書名各々について、参考のため冊数表示の後ろに旧目録との対応関係を示しておいた。識別の番号は、後掲の旧目録を参照されたい。概ね対応関係を認めうる判断したものは○、若干の疑問を残すものには△と表示した。

1	三元図解	四	(○ 1-13)
2	〔再刻〕頭書易经集註	一	二 (○ 1-10)
3	卜筮経験	六	(○ 1-14)
4	方鑿類要	六	(○ 1-1)
5	周易正文	二	(○ 1-11)
6	易学発蒙	四	(○ 1-3)
7	周易集註鈔	四	(○ 1-2)
8	周易程子傳序	一	(○ 1-4)
9	周易	一	(○ 1-9)
10	周易本義	二	(○ 1-8)
11	易学諺解	一	(○ 2-5, 2-6)
12	易経	一	(○ 2-12)
13	易学啓蒙	一	(○ 1-5)
14	易学啓蒙図解 完	一	
15	易原序	一	(○ 1-15)
16	眞入遺法手相明鑑	一	(○ 3-7)
17	占病範序	一	(△ 2-16)
18	天経或問註解序卷	一	(○ 1-7)
19	〔養和文庫〕占卜事傳諸傳秘録諸先生傳	一	(○ 2-19)
20	〔養和文庫〕占卜事傳解辭論及附録	一	(○ 2-20)
21	〔養和文庫〕占卜事傳解辭論附言	一	(○ 3-1)
22	家相傳	一	(○ 2-1)
23	家相一覽	一	(○ 1-18)
24	筮篋	一	(○ 1-16)

25	古易精義大成	1	(○2-9)	48	白杵古今和歌集	1	(○7-16?; 8-11?)
26	大上感應編■靈驗	1	(○3-6)	49	狂歌栗下宗匠傳系	1	(○7-18)
27	〔養和文庫／占卜事傳〕掌中秘鑑	11	(○2-18)	50	寛政十一己未歳旦	1	(▽11-2)
28	掌中秘鑑	11	(○2-14)	51	芭蕉翁反古文 全	1	(○7-15)
29	相法諺解	1	(○2-3)	52	俳諧紫之卷	1	(○7-17)
30	周易神秘傳	11	(○2-7)	53	手本文章	1	(○12-7)
31	周易秘傳書	1	(○2-10)	54	俳諧八重山吹	1	(○7-9)
32	方監明鏡	1	(○2-13)	55	奥要集	1	(○7-6)
33	北斗北辰七星經	1	(○3-4)	56	俳諧古今明題集	11	(○7-1)
34	周易卜料定	1	(○3-8)	57	洲崎稻荷宮に奉る花の歌	1	(○8-5)
35	相学口訣	1	(○2-2)	58	韻鏡法要	1	(○3-10)
36	月割判断記	1	(○3-9)	59	無々斎新宅賀漢和聯歌	1	(○8-3)
37	諏吉便覧 上下	11	(○2-15)	60	無々斎句集	11	(▽8-15)
38	阡陌の立石	1	(○4-4)	61	秘記註秘集	1	(○7-3)
39	易学提要	1	(▽2-11)	62	日用重寶判易天心籤	1	(○3-3)
40	〔宅担方鑿／両道奥儀〕河路極秘傳之卷	1	(○1-19)	63	勝地百盆壹之卷	1	
41	掌中龜鑑	1		64	俳諧本	1	
42	對聯全書	1		65	芭蕉翁繪詞集	1	
43	庚寅晴雨曆	1	(○3-5)				(46番ハツルか。○7-2)
44	俳諧豊後梅	1	(○7-13)	66	連歌手に於葉之事	11	(▽↓47番)
45	〔無々菴／発句集〕俳諧久知なし衣	11	(○7-10)	67	百人一首	1	(▽8-1)
46	芭蕉翁繪詞傳 上中	11	(○7-2)	68	白杵詣	1	(○8-18)
47	連歌手尔於葉之事	1		69	二十五箇條盡錦抄	1	(○7-5)
				70	秋日同諏翫月和歌	1	(○7-7)

(△66番も参照。7-19?; 8-13?)

71	三千能屋和歌集	1	(○ 8-4)	95	將軍家御略系	1	
72	俳諧集	1		96	諸侯領知録	1	
73	芭蕉流俳諧秘聞事書	1	(▽7-11)	97	稲葉御家系御家瑞標目	1	(○ 12-9)
74	百人一首色づけ	1	(○ 7-20)	98	各町々役家先祖書 <small>新訂欠</small>	七	
75	西国諸家盛衰記	1	(○ 11-20)	99	大友麾下姓名録	1	(○ 11-12)
76	豊後国志	1		100	太閤秀吉公朝鮮征伐軍配■	1	
77	天経或問註解図卷	1	(○ 1-6)	101	察病傳	1	(○ 2-17)
78	大東世語	1	(○ 11-16)	102	祝詞式解	1	(○ 4-2)
79	皇朝天文備考	1		103	祝文	1	(○ 3-14)
80	洛地準則	1	(○ 1-17)	104	諸祓并諄辭	1	(○ 4-1)
81	国史略	六	(○ 11-19)	105	納祇傳	1	(○ 3-11)
82	国祥便覧	1	(○ 12-8)	106	祝詞式正訓	1	(○ 4-3)
83	和漢年契	1	(○ 1-12)	107	温故年表録	四	(▽8-17, 8-21)
84	〔地理〕風水洛地略論	1	(○ 1-20)	108	譯準開口新語	1	(○ 11-18)
85	〔地理〕風水〔河語〕之辨	1	(▽3-12)	109	翻譯名義集摘要	1	
86	河語極秘辨	1	(○ 3-13)	110	大般若理趣分口	1	(○ 12-5)
87	草堂眺望記	1		111	寺社考(仏之部)	1	
88	長崎紀行	1	(○ 11-15)	112	聖徳太子日本未來記	1	(○ 12-1)
89	天候判断記	1		113	赤堂山順照上人一流ノ秘文	1	(○ 19-1)
90	大友家系	1		114	切支丹宗渡海来由 全	1	(○ 11-14)
91	町役家系譜	1	(○ 11-1)	115	正音千字文	1	(○ 12-4)
92	稲葉藩班次	1		116	白杵千字文序	1	(○ 12-15)
93	大友松野両家系図	1	(○ 12-2)	117	執筆撥證法	1	(○ 11-4)
94	御家中諸役系譜	1		118	満野長者傳記	1	(○ 11-3)

119	鼈頭定本墨色小筥	一	(〇8-9)
120	〔日本／史集〕倭千字文前後續	一	(〇8-17, 12-14)
121	拾遺千字文	一	
122	正音後千字文	一	(〇12-3)
123	鼈城藩臣分限録	一	(〇11-11)
124	稲葉物語	一	
125	鼈城藩臣志	一	
126	金光明最勝王経 全	一	
127	太上老君説常清静経	一	
	(一行空き)		
128	日本循環曆数速知全図	二	
129	地形図面	一六	
130	佛教関係資料	四	
131	家系関係	二	
132	里程表	一	
133	易経関係資料	五	
134	俳諧関係資料	一五	
135	その他書翰類		
	合計	二四七	

念のため述べておくと、最後の「その他書翰類」の下には点数の記載はなく空白にされており、罫線の欄外に合計数が二四七点と記されている。この合計数は最初の「三元図解」から「俳諧関係資料」までの冊数を合算した数に一致しており、「その他書翰類」は一まとめにして別枠とし、合計点数には入れられていなかったことになる。

次にもう一つは、これも白杵市所用のB5サイズ縦長の横書き用便せんを用い、これを横長に置き直して縦書きに使用したもの。昭和三十七年の寄贈書一覧表に比べると、点数も少ないため簡単な覚書という印象を受ける。昭和四十五年五月一日に寄贈をうけたものについての記録である。記載内容は以下のとおりで、通し番号も記載のままである。

- 1 俳句集の額 二個
- 2 薬師堂再建畧縁起 一
- 3 掛軸 四 雍通 佳方
春龍 豊具
- 4 土御門正三位晴親卿御直弟御許状 一
- 5 筧竹 一

便せん一枚のみの簡略なものであるが、通し番号が記載されている上、直後に寄贈年時が記されているため、複数枚の寄贈目録の内一枚だけが残ったわけではなく、この一枚で完結していると考えてよからう。典籍、文書以外の器物類を中心に、この時点で寄贈がなされたものと見ることができ、この昭和四十五年の寄贈品目録について注意されるのは、ここに記された寄贈品は一見するといずれも旧目録に記載がないように見える点である。先に旧目録の作成時期は不明と述べたけれども、旧目録にこれら寄贈品についての記載がないとすれば、旧目録の作成は昭和四十五年以前であったと考えたくなる。ところで、昭和四十五年にはこれ以外にも少なくとも三点が寄贈されていることが、調査により判明している。今回新たに作成した目録(新目録)では、「半時庵画賛句」「和歌懐紙「月似鏡」」「漢詩「誦詩聞国政／講易見天心」」と仮に題した三軸である。これらは内容から判断して、上記

3の掛け軸四点と一致するものでは無からうと判断される。

ここで注意されるのは、「和歌懐紙「月似鏡」」と題した一軸は、ほぼ間違いない旧目録の二十三頁に見える「月似鏡」のことであろうと考えられることである。そのような眼で確認し直すと、「漢詩「誦詩聞国政／講易見天心」」と題した一軸は、その奥書から同じく旧目録二十三頁の「井坂常陸大掾筆」と記載された一点を指すものとの推測が可能となる。すると、旧目録

の作成は昭和四十五年以降ということになり、そのような前提から推測を働かせると、必ずしも確定はしがないものの、上記目録の四軸のうち「雍通」と記されるものは、やはり旧目録二十三頁の「雍通公筆 桜ぞ花に」のこゝと、「春龍」と記されるものは、同じく旧目録「三ヶ舎文足寿像（天保癸巳）」のことでないかと見通しが立つ。後者は今回の調査により、新目録「諸資料」の部に「陰陽文林郎天心齋大徳宗観居士寿像」一軸として登録したものに同定ができそうで、加島英国像に天保四年（癸巳）の年記をもつ春龍の賛が寄せられている。この推測に誤りがなければ、旧目録二十三頁の冒頭「佳方筆俳句」は、受入目録の掛軸四点中の「佳方」でよいかもしれない。ちなみに先に、受入目録にはないが昭和四十五年寄贈と認定される軸物の一点として、名前を挙げた「半時庵画賛句」には「佳芳」なる者の奥書があり、これが受入目録の「佳方」の可能性もある。いずれにせよ、受入目録の軸物の中で旧目録上に確認のとれぬものは「豊具」だけとなる。

問題となった昭和四十五年の寄贈品について考える上で、これに加えて注目しなければならぬのは、先に述べたボール紙表紙付き封筒のことである。実は、かつて文書の整理に用いられていたこの封筒は、基本的には既になら廃棄されており、見本として残された一点のみが伝わる。その残された封筒こそ、昭和四十五年寄贈の「薬師堂再建略縁起」を収めていたものなのである。当該封筒のボール紙表紙にあたる部分には、次のような記載がある。

昭和四十五年四月三十日／薬師堂再建略縁起（英国）／英国関係諸記録
／藩内待遇／画像／各師匠／拝飲免許 等／加島氏寄贈

受入目録の前日の日付となっているが、薬師堂再建略縁起と共に寄贈された資料群が、受入目録とはやや違った形で記録されているのである。薬師堂再建略縁起以下の資料が当該年時に寄贈されたことを証するものは、このボール紙表紙の記載以外にはなく（ただし「英国関係諸記録」だけは別だが）、受入目録に準ずる貴重な証言となっている。

表紙記載の資料名は簡略なため、現存資料に対応するものがあるとしてもその同定は難しいが、少なくとも「英国関係諸記録」と推測される一点は、調査により確認されている。該書は、仮にボール紙表紙記載の題をとり「英国関係諸記録」と命名した、わずか三丁から成る無題の資料で、レポー

ト用紙を転用した後補表紙に同年四月三十日付け「加島氏寄贈」の旨が記されていることから、「薬師堂再建略縁起」と同時に寄贈された一点と認定できる。してみると、昭和四十五年の受入目録はどのような事情のもとに作成されたのかよく判らないが、どうやら同年の寄贈品の全貌を示すとはみなし難い目録であるようだ。

ところで、旧目録が昭和四十五年以降に作成されたものとする、笠竹など特殊な資料を記録していないことはともかくとして、「薬師堂再建略縁起」や「土御門正三位晴親御直弟御許状」のように、掲載して当然と思われる資料についても旧目録に見当たらないようであることが不審となる。また一方、和歌懐紙「月似鏡」、漢詩「誦詩聞国政、講易見天心」が受入目録にも紙帙表紙にも記載されていないらしいのも不審だが、これは紙帙表紙の「拝飲免許 等」の「等」に含まれるものか、あるいは同じ昭和四十五年でも受入目録の記載品とは時を異にして寄贈された故、ということであろうか。いずれにせよ受入目録と旧目録との関係については、なお判然としないものを残すようである。

さて、四十五年の受入目録の話題が先に細部にわたり過ぎてしまったが、三十七年受入目録についても、これと同様に旧目録と突き合わせながら、併せて現存する伝来資料との同定をはかり、加島家からの寄贈品を確定してゆくことになる。そしてここでもやはり、現存の資料とこの受入目録との関係でいくつ問題となる点がある。大半の資料については、その題名や内容表示の記載により目録との同定がはかりうるのだが、中には判断に迷うものも相当にあるからだ。先にも記したように、多少の問題はあっても現存資料との関係を認めうるものには○を付し、慎重な検討の必要なものには△とした。ただし実際には微妙な判断を伴うものも多く、○のものにもコメントが必要な場合にはコメントを付し、対応関係の整理をはかつておくこととする。

1番の三元図解は先に示したように旧目録「1」の典籍で誤りないと思われるが、現存典籍冊数は旧目録記載のとおり五冊である。受け入れ後に紛失という事態はよくあることだが、増えているのはやや不審である。単純な数え間違いなのか、五冊のうち一冊がはぐれていて後に改めて寄贈されたのか、

事情はつきりしない。同様に2番の易经集註も現存十三冊だが、受入目録では十二冊である。7番は冊数表示からは旧目録「レ」がきれいに対応するが、本来、次の8番(旧目録「レ」)とツレであったと思われる、その点に気づかず目録化したものか。46番の芭蕉絵詞傳も現在は揃いの3冊である。ただし、この場合は65番の「芭蕉翁繪詞集」一冊が下冊に該当するものであったかもしれない。こうした複数の事例からは、寄贈時には不揃い本が多く含まれており、後にツレが発見されると追加で寄贈されたという経緯が想定され、目録と現存物との対応にかかわる問題と見る必要はなさそうである。ゆえに特別な場合を除き、以下冊数の不一致については特に問題としない。

47番と66番との「連歌手尔於葉之事」は、47が一冊、66が二冊となっている。これに該当しそうなものとして、旧目録「レ」の「連歌手尔於葉大事」と同8「レ」連歌てにおは大事」各一冊がある。また、現存典籍の中にも内題に「連歌手尔於葉大事」とする一冊、外題に「連歌手尔於葉之大事」とする一冊がある。なお、もう一点、「連歌手尔於葉大事」を合冊する「秘註秘集」一冊があるけれども、これは外題の一致から旧目録「レ」の受入目録61番に対応するものとみるべきであろう。ところで、66番の二冊という記載からは、額面通り受け取れば上下二冊から成る本の形をとる別の一点が存在したものと考えるべきだが、あるいは内容上の判断から現存の二点を一對のものとして記した可能性もないとはいえない。あるいは現存二点のうち一点が本来二冊本であったものが不揃いとなったのか、これもはつきりしない。いずれにせよ受入目録によれば、計三冊なければならぬ同題書は、今では一冊本二点を残すのみであり、それぞれが目録のどれに対応するのか確定は難しい。

なおこれに関連して付け加えておくと、受入目録には関与しない問題だが、旧目録の七頁と八頁との間には同名もしくは類似書名の重なりが複数見られることにも注意をする必要がある。具体的には、以下のような例がある。

- ・ (7-15) 翁反古文と (8-14) 芭蕉翁反古文
- ・ (7-16) 白杵古今和歌集と (8-9) 白杵古今和歌集
- ・ (7-17) 俳諧紫之巻と (8-10) 俳諧紫ノ巻
- ・ (7-19) 連歌手尔於葉大事と (8-11) 連歌てにおは大事

・ (7-20) 百人一首と (8-7) 百人一首

このうち、実際に複数点の伝存が確認できる例は、「連歌手尔於葉(之)大事」のみなのである。にも関わらず、書名の重複が多すぎるように思われることからすれば、両頁の間で作業の中断があり、そのために重複して採録した書目が生じたということなのであろう。だが、「手尔於葉(てにおは)大事」が重複採録にあたるのか否か、容易には判断しがたい。

59番「無々斎新宅賀漢和聯歌」は外題の一致度の高さから、旧目録「レ」の「幽齋新宅賀漢和聯句」と認定した。おそらくは、加島英国の庵号である「無々庵」からの類推で、「幽」の字を「無々」の崩しと読み誤ったものである。現存典籍も「幽齋」となっている。

120番、121番は旧目録「レ」と「レ」が対応しそうであるが、現存典籍と照合すると前・後・続・拾遺の計四冊である。ところが、120書名欄には「前後續」と記しながらその冊数は一冊とされており、これも不審である。

旧目録外「追加資料」の件

さて、上記の通り、加島家資料の調査は図書館に収蔵されてきた資料群と「旧目録」、および二種の受け入れ目録とを相互に照合して進めることとなった。だが、現在、白杵市で「加島家資料」として保管している資料群は、右二点の受け入れ目録を明らかに超えるものを含んでいる。その中には『桜翁雜録』のように明らかに加島英国の筆録した資料と考えられるもの等、加島家からの寄贈を疑うことの難しい資料が含まれており、他家資料の混入とは考えがたいものもある。ゆえに、加島家からの寄贈は少なくとも三回以上にわたるものであったことは確実である。あるいは、現時点においては見出されていないけれども、上記二回の受け入れとは別の折の受け入れ目録が存在していた可能性もなくはないのだが、現市立図書館の収蔵庫の耐震工事に伴う大がかりな整理に際しても、新たな目録は発見されなかったようである。

最初に寄贈を受けた白杵図書館では、受け入れ目録を抛り所にして、これら複数回にわたる加島家からの寄贈資料を管理保管してきたはずだが、その

管理状況と資料取り扱いの経過については、職員の異動によりもはや正確な把握は難しい。そして、ある時期にこれらを一括の資料として把握し、保存の便に資するために、おそらくは図書館の職員の手により、上記の旧目録が作成されたものと思われる。その際に、これもおそらくはという推測を交えた判断ならざるをえないけれども、過去の受け入れ目録と対照しながら、現に図書館に保管されている資料群との突き合わせがなされたと思われる。ただし、現存資料と旧目録との対応についても、先の受け入れ目録と同様の不審がいくつか見られる。その点の具体例については次節において述べることにして、その前にもう一点補っておくことがある。

今回新たに作成した新目録と、過去の受け入れ目録、そして旧目録とを比べてみると、当然のことながら現時点において存在の確認できない資料がいくつもある。かつては、これら古典籍、文書資料も閲覧の要望があれば貸し出しまでしていたとのことで、そのために行方不明となった資料が出てくることは仕方がない。どのように厳密に管理しようとも、紛失はつきものである。むしろここで問題となるのは、受入目録や旧目録との対応がはっきりしない資料がかなりの量にのぼることの方である。

これまで繰り返し述べてきたように、ここに目録化して示した資料を「加島家資料」とする認定の根拠は、旧目録に登載されているか受入目録に記載があるかである。すると、それらのいずれとも同定がはかれない資料が、「加島家資料」として目録化されているその根拠とは何か、それが問われよう。そのもう一つの根拠こそが、先に薬師堂再建略縁起に関連してふれたボール紙表紙付きの封筒なのである。見本として一点のみ残された封筒は、もともとは加島家資料だけでなく図書館に寄贈された諸家からの資料群の整理のためにかなりの数が作られ、活用されていたという。しかし、資料群の本格的な再調査にあわせて、資料の酸性劣化を防ぐ意味からも資料と封筒は分離させ、最後は処分されてしまったということである。そこには薬師堂再建略縁起に見られたように、資料名だけでなく伝来についての記録が残されており、それを根拠として「加島家資料」とされたものがある、ということだ。

そして、このボール紙表紙についてもう一点注意すべき点を指摘しておく。唯一残された薬師堂再建略縁起に沿えられていた封筒から判断するに、

表紙の墨書は旧目録の筆跡とどうやら同じもののように思われることである。この印象に誤りがないのであれば、伝来を重視し「加島英国資料目録」を作成したのと同じ者の手により、封筒による諸家の文書整理もなされたらしいということになる。しかしそうなると今度は、既述のとおり、ボール紙表紙付き封筒により整理された文書の中に、旧目録に記載のない文書があることをどのように考えるべきか、目録作成の時期と封筒による整理との前後関係はどうであったのか等、いろいろ気掛かりの問題が出てくる。旧目録作成後にも加島家から追加の寄贈があったのか、あるいは既に寄贈を受けていながら旧目録作成時にはみつからなかった資料が、しかも加島家伝来の根拠をもつ資料が何かの折に発見されたのか、いずれとも分からないが、旧目録の作成も封筒による文書整理も、完遂されることなく中断されたのが実情である。受入目録、旧目録外の「加島資料」とは、このような認定を経たものである。

かつての封筒の整理にせよ、旧目録の整理にせよ、それを試みた際には拠るべき根拠があつて「加島家寄贈」の認定がなされたはずだが、今日においてはその追検証のできないものも多い。それがために、幾つかの不審が発生する。特に伝来について疑問のあるものについて特記しておく、「諸侯城地名」と題した文書史料一点には、「寄贈」印が捺されそこに「後藤熊男」氏の名がペン書きされている。その内容も「白杵家士後藤鉄雄」の編になるものと認められ、後藤氏からの寄贈に疑いを抱かせるものではない。にもかかわらず、同書表紙には「加島英国資料の内」と記されていたため、今回の調査の対象に加えている。次に、「白杵千字文」と題する書物が複数、調査の対象となったが、そのうちの一本には「小林常三氏寄贈」と明記されており、これも伝来の素性が異なるものである。「白杵千字文」が英国の著作であることから、素朴に加島家「関連」資料としたものか、はっきりとは定めたい。

また、一点だけであるが昭和十一年八月十八日に加島英発氏よりの寄贈の確認できる資料がある（新目録「文書」③33番『関ヶ原陣図』）ののだが、これも加島家からという点では問題ないものの、他の加島家資料とは異なるかつての管理状況が知られる点で興味深いところがある。というのも、同図には稲葉家資料の多くと同様、八門分類の旧分類ラベルが貼付され

ており、このことから、寄贈印により加島家からの伝来情報を残しながら、稲葉家資料とともに八門分類で管理されていた加島家資料もあったことが知られるからである。同じ時期に他にも加島家から寄贈がなされていたれば、同様の寄贈年記載をもつ資料がありそうなものだが、他には同年の寄贈記載も八門分類のラベルも、調査対象の中には見いだされなかったことを報告しておく。

『温故年表録』の問題

上記のように、「加島家資料」の認定には幾つかの問題を含んでいるのであるが、以下では、そのことを『温故年表録』という具体的な資料にそって検討をしてみたいと思う。

『温故年表録』の書名は、先に掲げた昭和三十七年の受入目録の107番にその名が記載されているが、これが旧目録では8-15、8-19にいずれも「温故年表」として登録されている。8-15は一冊、そして8-19は旧目録の摘要欄に「桐箱入、3冊」と記されており、合わせると四冊になり、受入目録の記載とたしかに整合する。ところが、旧目録でその先を見ていくと2-11「温故年表録上」、12-12「温故年表録」、12-13「温故年表録大全」と類似題の書目が並んでいる箇所を見出す。このうち2-11は題名も微妙に異なり、かつ旧目録の摘要欄に「嘉永再訂諸家盛衰考」とあることから、「嘉永再訂諸家盛衰考／温故年表録大全」との外題を有する現存一冊との同定が可能である。また12-12は、これも旧目録の「巻数」欄に「乾、坤」と記載されており、乾坤二巻構成の二冊本『温故年表録』の現存から対応関係を確認できる。残る12-13は旧目録の記載からは上巻のみ伝存の一冊本と思われるが、これに該当する同名書は確認できなかった。

また、旧目録8-19に対応すると思われる箱入り三冊本も現存を確認でき、8-15と対応するかと思われる一冊完本も存在を確認できる。しかし、受入目録107番「温故年表録」四冊と記すものを、この箱入り三冊本と箱なしの一冊本との組み合わせに引き当てて考えてよいかとなると、常識的にはそのような見做しは難しい。もちろん、伝存した『温故年表録』とは別に、さらに一

点四冊本が存在した可能性は考慮してよいのだが、いずれにせよ現存伝本と受入目録、旧目録との関係は錯綜している。

しかし、錯綜しているのは現存の典籍と目録との同定に関する問題だけではない。その点を明らかにするために、旧目録8-15に対応すると思われる印籠蓋の木箱入りの三冊本『温故年表録』について、以下、少し詳しく言及しておく必要がある。

問題の在処をはつきり示すのは、その伝来事情を伝える貼り紙の存在である。まずは箱の底に貼付された紙片の記事を示してみる。そこには「十二月廿七日／会所／掛町加嶋弥平太事／年表録仕立／大殿様江差上候付／銀拾枚御画壹枚／被下候其通可／申聞候」と記されており、これによるとこの「年表録」は「大殿様」へ献上したものであり、その対価として「銀拾枚」と「御画壹枚」が下げ渡されたという。

また、箱蓋の内側には、「天保六年乙未四月十五日／御在所町人加嶋弥平太江／認被仰付出来候栗屋静勝／持参差上之」「浅黄表紙二冊／天保十四卯閏九月／栗屋静勝出府候節持参／此家系二冊文久元年御在所御持込／御用人御下相成」と記した二枚の紙片が貼付されている。前者は、加嶋弥平太に命ぜられていた本書の制作が成ったため、栗屋静勝がこれを持参し届けたことを伝えるものである。即ち、献上が天保六年（一八三五）四月のこと、そしてそれに対する報償が同年十二月に与えられたという関係と理解してよからう。これらの識語によれば、当該の『温故年表録』は明らかに藩に収められたものであり、そのことを裏付けるように、桐箱の蓋の右上には「甲号■一」と記された紙片が貼り付けられている。この符号は稲葉家資料の多くに付せられているものである。

ただし、蓋内の紙片の後者によれば、同書（浅黄表紙二冊）は天保十四年（一八四三）栗屋の出府の際に持ち出され、文久元年（一八六一）に江戸屋敷の御用人某に下げ渡されたというのである。その後、同書の辿った経路は分からないのだが、最後は白杵の地に戻りもう一冊と組みになり桐箱に収まったことになる。もと二冊であったものがどのようにして現存の三冊になったのか、一度出府にあたって持ち出されたものが、どのように白杵に戻ったのか等、伝来経路の詳細については不明な点が多いが、戻ってきた先としては、加島の家よりは稲葉家へと考える方が自然であろう。

このような伝来事情を考えると、この木箱入りの三冊本はそもそも加島家から図書館へ入った資料であったのか、「寄贈図書一覽」の『温故年表録』四冊のうちを含めてよいものかどうか、その点が根本的に問われることになるだろう。それは即ち、旧目録がその表紙に「加島修氏寄贈」とうたう、その認定根拠への懐疑を呼び起こしかねないことなのである。

ただし、この木箱入り三冊本『温故年表録』を加島家寄贈書から除く確かな根拠があるわけでもない。あくまで、稲葉家資料と見るのが妥当か、というの蓋然性の問題なのである。問題は『温故年表録』に限らない可能性も秘めているのだが、ここでは寄贈目録を越える範囲のものについてはあくまで判断を保留しつつ、加島家資料として仮に区分された資料群の調査結果を報告するものである。

以下に参考資料として、「旧目録」の情報を頁割りに合わせて掲げておく。煩雑を避け所掲の書目のみを示すこととする。なお、旧目録との対照の便を考え頁ごとに通し番号を付した。新たな目録に〔一〕のように記した場合、旧目録の一頁目の一番の書目（資料）に該当すると判断される、との表示である。御覧いただくに判るように、旧目録には一定の分類意識が働いており、実際に一頁目であれば「易学」のような分類が明記されている。ただし、今日の目から見るとその分類はかなり曖昧であり、場合によっては明かに不適当な分類に資料が配置されている例も散見する。そのため、旧目録の分類を生かすことは逆に混乱を誘発する恐れがあることから、敢えて分類名称は記載せず記載頁と題のみの表示とした。刊写の別や冊数の表示については、記載されていないものもあるため、記載のあるものに限って書名の後ろに追記した。もとの目録には「摘要」欄などを設け、様々な覚えが記載されているがここにはほとんどを省き、一部「摘要」等から採録した情報については〔一〕付きで記載した。

〔旧目録〕

一頁

- 1 方鑑類要 刊六〔卷2〜7〕
- 2 周易集註鈔 刊四〔13,17,19,21卷〕

二頁

- 3 易学発蒙 刊四〔仁・義・礼・智卷〕
- 4 周易程子伝序 刊一
- 5 易学啓蒙 刊二〔乾・坤〕
- 6 天経或問註解図 刊二〔上・下〕
- 7 天経或問註解図序 刊一
- 8 周易本義 刊二〔1、2〕
- 9 真音傍訓周易句解卷【ノ五?】 刊二冊
- 10 周易集註 刊十三〔1〜13。ただし摘要欄には序目及び1〜20、23、24の記載あり〕
- 11 周易正文 刊二〔上・下〕
- 12 和漢年契（年表） 刊一
- 13 三元図解 刊五〔1〜5〕
- 14 卜筮経験 刊六〔1〜3、各上下〕
- 15 易 原序 刊一
- 16 籙篋卷第一目録 刊一〔上・下〕
- 17 洛地準則 刊二〔乾・坤〕
- 18 家相一覽 刊一〔「乾坤」と「乾」と、両方の記載あり〕
- 19 河洛極秘伝之卷 写
- 20 洛地略論 写一
- 1 家相伝 写二
- 2 相学口訣 写一
- 3 相法言彦解 刊一〔乾坤合〕
- 4 易学集成亀鑑
- 5 易学諺解 刊一〔上〕
- 6 〃 刊一〔下〕
- 7 周易神秘伝 写一〔乾〕
- 8 相法摘要 刊一〔上中下合〕
- 9 古易精義大成 刊一

- 三頁
- 10 周易秘伝書 写一
 - 11 易学撮要 写一
 - 12 易経 写二〔乾・坤〕
 - 13 方監明鏡 写一
 - 14 掌中秘鑑 写二
 - 15 陰陽諏吉便覧 刊二〔上・下〕
 - 16 占病軌範（察病書） 刊一
 - 17 察病伝 写一〔乾坤合〕
 - 18 掌中秘鑑 写一
 - 19 諸伝秘録 写一
 - 20 解辞論附録 写一
 - 1 解辞論附言 写一
 - 2 掌中秘鑑 写一
 - 3 日用重宝判易天心籤 写一
 - 4 北斗北辰七曜経 写一
 - 5 庚寅晴雨曆 写一
 - 6 太上感應編靈験 刊一
 - 7 真入髓法手相明鑑 刊一
 - 8 周易卜料定他 写一
 - 9 月割判断記 写一
 - 10 韻鏡法要 写一
 - 11 納祇伝 写一
 - 12 河洛極秘弁 写一
 - 13 〃 写一
 - 14 祝文 写一
 - 15 名乘名鑑 写一
 - 16 祭祀次第 刊一
 - 17 太元神祭文 写一

- 四頁
- 18 神典 写
 - 19 神道八部祓 写
 - 20 勸請神名録 写
 - 1 諸祓并諄辞 写一
 - 2 祝詞式解 写一
 - 3 祝詞式正訓 刊一
 - 4 阡陌の立石 刊一
 - 5 諸文押義要括集之卷 写一
- 五頁
- 1 曆学 写一
 - 2 易学 写一
 - 3 曆学 写一
 - 4 曆学 写一
 - 5 〃 写一
- 六頁
- 1 大社竜蛇弁 一
 - 2 のりと 一
 - 3 卦の祓すい 一
 - 4 御武具之内 一
 - 5 御門人定式 一
 - 6 陰鬼妖霊切断之法 一
 - 7 のりと 二
 - 8 加島英国のりと 二
 - 9 堀井法、軽風他 一
 - 10 螢火武威丸 一
 - 11 易書 一
 - 12 御直弟并御役所門人 一
 - 13 御家中座席 一

八頁

- 14 土御門家御授与 一
- 15 加島弥平太初伝 一
- 16 方位図 一
- 17 本命元星符 一
- 18 藤本内匠
- 19 水法伝受誓書
- 20 のりと

七頁

- 1 俳諧古今明題集 写三〔春・秋・冬〕
- 2 芭蕉翁絵詞伝 刊三〔上・中・下〕
- 3 秘記註秘集 写一
- 4 俳諧伝と云うこと 写二〔上・下〕
- 5 廿五箇条尽錦抄 写一
- 6 奥要集 写一
- 7 俳諧綴 写一
- 8 俳諧伝 写一
- 9 俳諧八重山吹 写一
- 10 俳諧くちなし衣 写二〔天・地〕
- 11 芭蕉流俳諧秘事聞書 写一
- 12 俳諧書 写一
- 13 俳諧豊後梅 写一
- 14 無々庵俳諧集 写一
- 15 翁反古文 写一
- 16 白杵古今和歌集 写一
- 17 俳諧紫之卷 写一
- 18 栗下宗匠伝系 写一
- 19 連歌手尔於葉大事 写一
- 20 百人一首 写一

八頁

- 1 百人一首
- 2 小倉百人一首講釈 刊一
- 3 幽齋新宅賀漢和聯歌 写一
- 4 三千能屋和歌集 写一
- 5 洲崎稻荷宮に奉る花のうた 写一
- 6 松ヶ崎禹稷廟に奉る紅葉のうた 写一
- 7 墨色小筵 刊一
- 8 遊優園にての和歌 写一
- 9 白杵古今和歌集 写一
- 10 誹諧紫ノ卷 写一
- 11 連歌てにおは大事 写一
- 12 無々庵俳文集 写一
- 13 無々庵句集 写一
- 14 芭蕉翁反古文全 写一
- 15 温故年表 写一
- 16 白杵詣 写一
- 17 倭千字文 写三
- 18 大日本年表支幹循環 一
- 19 温故年表 一〔桐箱入、3冊〕
- 20 白杵千字文 一〔桐箱入〕

九頁

- 1 寄桜祝之附言 写一
- 2 印譜 写一
- 3 桜によする自画像 写一
- 4 英国画像 写一
- 5 土器 桐箱入
- 6 賦俳諧連歌 写一
- 7 名所月 写一

- 8 寿 短冊 写一
 9 ゆずり状 無々庵へ 写一
 10 無々庵吐洲叟へ 写一
 11 俳諧の伝係 写一
 12 芭蕉翁桃青より 写一
- 一〇頁
- 1 源氏物語中の和歌
 2 発句々案
 3 免状表包
 4 宗派表包
 5 寿 表包
 6 手紙
 7 誓盟
 8 俳諧之伝系
 9 井眉 全五通
 10 升六 全
 11 半時庵 全
 12 桜翁句 一
- 一一頁
- 1 町役家系譜 写一
 2 詩譜 写一
 3 満野長者伝記 写一
 4 双鉤単鉤 写一
 5 西筑紀行 写一
 6 長崎道中記 写一
 7 東日記 写一(注)
 8 勢陽紀行 写一
 9 美知志留べ 写一
 10 桜翁雜録 写一

- 11 亀城藩臣分限録 写一
 12 大友麾下姓名録 写一
 13 太閤秀吉朝鮮役軍配 写一
 14 切支丹渡海来由 写一
 15 長崎紀行 写一
 16 大東世語 写一
 17 新編金瓶梅第七集 刊写一
 18 訳準開口新語 写一
 19 〈明治新刻〉国史略 刊〔2〕〔7〕
 20 西国諸家盛衰記 写二
- 一二頁
- 1 聖徳太子日本未来記 写一
 2 大友家譜 写一
 3 正音後千字文 写一
 4 正音千字文 写一
 5 大般若理趣分口訣 全一
 6 手本文章集草 全一
 7 手本文章 全一
 8 国祥便覧 全一
 9 御家瑞標目 完一
 10 将軍家御略系 完一
 11 温故年表録上 完〔上〕
 12 温故年表録 完〔乾・坤〕
 13 温故年表録大全 完一
 14 日本史集倭千字文統論 完一
 15 白杵千字文序 完一
- 一三頁
- 1 如泥齋主人
 2 東都服元雅

3 詩儻道人守直卿撰
4 富小路正三位貞直卿

5 勝尚

6 東都服元雅

7 藤井文崇

8 武藤吉祥

9 源宜贍拜写

10 飛田龜

11 若林興宣

12 桜華道人弔

一四頁

1 有楽流茶道稽古目録 写一

2 遠州流茶道許状 写一

3 遠州流薄茶許状 写一

4 遠州流茶道許状 写一

5 甲子中春山内庄三郎茶事 写一

一五頁

1 正三位殿死去通知 一

2 御子様御誕生 一

3 新年目出度くゝ 一

4 朝廷内侍所一御寄附 一

5 新年目出度くゝ 一

6 短冊目録 二

7 白杵大火の見舞 一

一六頁

1 加島系図 写一

2 五郡家系図 写一

3 成田氏過去帳 写一

4 重助方一家起立の次第書 写一

5 附言(加島系図の)

一七頁

1 大友家法号 写一

2 大友家御歴代 写一

3 成田氏略系 写一

4 安陪氏系 写一

5 畑部落定右衛門系図 写一

一八頁

1 鼈城太守君御法諱 写一

2 稲葉系譜 写一

3 河野系図 写一

4 稲葉系図 写一

5 河・稲本支一覽表 写一

6 河野系図 写一

7 御系図下書 写一

8 寛文二御船方一 写一

9 御歴代御法名附 写一

10 稲家系譜尋問往来記 写一

一九頁

1 赤松山順照上人一流の秘文 写一

2 覚(大橋寺の領収書) 写一

3 曼陀羅控 写一

4 臨池学書法の秘文 写一

5 詠桜花賀■家主人六十として長歌并短歌 写一

6 太神宮遙拝所開発 写一

7 天心斎文庫他残

8 否之華三十五歳男 写三

9 百九拾参歳の長寿者の記 写一

10 孝女(川登りか) 写一

- 11 法雲山大橋寺精舎六字名号額来由 写一
- 12 釈迦牟尼仏他残 写一
- 13 弘法大師一千年遠忌捻香賦 写一
- 14 四国靈刹八十八箇所 写一

二〇頁

- 1 詩韻珠璣 写一
 - 2 詩鄭第七 写一
 - 3 姓名学 写一
 - 4 〃 写一
 - 5 欽考 写一
 - 6 英字考 写一
 - 7 英の字元来一 写一
 - 8 印鑑紙
 - 9 婚礼略式 写一
 - 10 御餞別御婚礼 写一
 - 11 舌代 写一
 - 12 触 写一
- 二二頁
- 1 書手本写 写一
 - 2 〃 写一
 - 3 〃 写一
 - 4 〃 写一
 - 5 〃 写一
 - 6 〃 写一
 - 7 三千文字ももつて一 写一
 - 8 蛮語一方言 写一
 - 9 花所々 写一
 - 10 春日詠井手山吹花 写一

二三頁

- 1 淡路島之図 写一
- 2 大阪冬之陣之図 写一
- 3 大阪夏之陣之図 写一
- 4 大阪城図 写一
- 5 大阪市街図 写一
- 6 九州里程表 写一
- 7 佐伯領絵図 写一
- 8 柳宮得図 写一
- 9 掛町多葉胡屋見取図 写一

二四頁

- 1 佳方筆俳句 写一
- 2 月似鏡 写一
- 3 井阪常陸大掾筆 写一
- 4 鯉之図 写一
- 5 三ヶ舎文足寿像(天保癸巳) 写一
- 6 雍通公筆 桜ぞ花に 写一
- 7 天文之図 写一
- 8 和漢筆法伝授来由 写一
- 9 会席法度の古式 写一
- 10 小倉百人一首講釈

(注)『白杵史談』第六五号、六六号に「加島英国、江戸日記」(東日記)として、高橋長一氏による紹介あり。